

話し手の意味(Speaker's Meaning)について

中 島 信 夫

0. はじめに

語用論は、意味論と同じように言葉の意味を研究する学問であるが、意味のとらえ方が基本的に異なっている。Leech (1983:5-6) の言うように、意味論では、言葉そのものだけを取り出し「言葉Xはこれこれの意味する」といったように、言葉そのものの持つある種の2項関係として意味を捉えようとするのに対し、語用論では、話し手がある言葉Xを用いてどのようなことを意味しようとするのかといったように、具体的な言語使用の場面で言葉が話し手と持つ3項関係の中でその意味を捉えようとする。以下では、このような語用論的な意味の捉え方で話し手の意味とはどのようなものかを示すことにより、語用論という研究分野の概略を示す。

1. 文の意味と発話の意味

まず、文という統語的単位の意味とその文がコミュニケーションの場で話し手から聞き手への発話(utterance)として現れた場合の意味との違いについて見てみる。例えば、次のような平叙文は「三角形の内角の和は180°である」という幾何学の定理を述べている。

(1) In Euclidean geometry the inside angles of every triangle add up to exactly 180 degrees.

この文が次のようにAの質問に対するBの返答という発話として現れた場合、その発話の意味は同じく幾何学の定理を述べるもので特に変わってはいないように思える。

(2) A: What is the sum of the angles in a triangle?

B: In Euclidean geometry the inside angles of every triangle add up to exactly 180 degrees.
ところが次のような文では事情が変わってくる。

(3) It was his.

この文は、「ある物事は、ある男と何らかの関係のある物事であった」といったような非常に漠然とした意味であるが、次のようなコミュニケーションの場における発話として現れた場合には、具体的な意味を持ってくる。

(4) (交通事故の現場で)

警官: Well, whose fault was it?

男 A: It was his.

男 B: No, it was his.

この場面で(3)の文は、男Aの発話と男Bの発話という異なった二つの発話として現れ、それぞれ次の(5a)と(5b)のような異なった意味を持つ。

(5)a. The car accident was B's fault. (事故はBに落ち度があった)

b. The car accident was A's fault. (事故はAに落ち度があった)

すなわち、(4)の事故現場での発話では、代名詞it, hisの意味が特定され、さらに過去時制wasによって発話が表す状況が発話の前の特定の時点であることが示される。

次の文はJoanがHoraceに出会った場面の描写で、その発話では過去時制によって出会いの時点が特定されるが、文の意味と発話の意味との違いは一見少ないように見える。

(6) Joan waved her arms wildly, and finally Horace saw her.

しかし、その出会いの場面は、空港での出会いとかレストランでの出会いといったように様々な場面が考えられ、発話ごとに特定されなければならない (Van Oosten (1986:20-21))。

また、次の文では、いわゆる直示表現 (deictic expression) の一つである1人称代名詞Iがあるため、(3)と同じく文の意味としては誰について述べるかは特定されず、発話ごとに「その話し手の体調とか何か

が良好,あるいは大丈夫である」という意味になる。

(7) I am fine.

さらに, 次のような場面での発話では, (7)の文の発話は, 「(飲み物がなくても) 大丈夫である」という意味に加えて飲み物提供に対する断りという役割を持っているが, この役割は文としての意味には含まれてはいない。

(8) OLIVER: (Would you) Care for a drink?

MITCH: No, I'm fine.

The Firm

次のような場面でも, 話し手の体調についての情報を与えるというよりは, 挨拶に対する返答としての役割が主になる。

(9) ROSALIND: How are you doing today?

ED: (I am) Fine, thanks. And you?

ROSALIND: Very well. Thank you for asking.

Erin Brockovich

発話は, また, この場合のように省略された不完全な形になることがあるが, 意味はコンテキストから補完され完結している。

以上のことから分かるように, (1)の例のように発話の意味が文の意味と同じである場合はまれで, 一般には発話の意味は文の意味としては特定されない様々な意味や役割を持つ。

2. タイプとしての文とそのトークンとしての発話

上で見たように, 一つの文は様々な発話として現れるが, この関係はタイプとトークンの関係として捉えることができる。タイプとしての文は抽象的なものであるが, そのトークンとしての発話は, 音声や書き連ねた文字として, 話し手の行為あるいは出来事として耳とか目で知覚できる具体的なものである。この関係は, 三個のリング, 三匹の猫, 三軒の家といったものの集まりである集合とそれらが共通に持つ特性である3という数(かず)との関係と並行している。3という数は一つであるが個数3の集合は無数にある。また, 3という数は抽象的なもので, 目で見たりすることはできないが, 三個のリング, 三匹の猫といった集合は見たり触ったりできる具体的なものである。そうした集合には, 個数3という特性以外に構成物の持つ様々な特性, 猫の集合の場合は猫に関する特性, が付随している。文のトークンである発話が文の持つ特性以外に様々な特性を持つのも, これと同様のことと考えることができる。

3という数は「3」という数字を使って表示するが, 文の場合には一般にはそのような記号では表示しない。

文を表示する場合, 普通, 次のような言い方をする。

(10) (The sentence) 'I am fine' consists of three words.

('I am fine' という文は三つの単語からなる)

この(10)のような文の発話において, 'I am fine' という部分は話し手とか聞き手といったまわりの状況を捨象して音声あるいは文字だけのトークンを取り出し, このトークンでもってタイプとして文を表している。このように見本となるトークンでもってそのタイプを表すことは日常的な場面でも良くあることである。例えば, 一足の靴を指し示して次のような文を発話するとき, thoseはその目の前にある靴そのものではなく, そのタイプを指している (Recanati (2001:639-640))。

(11) Those are no longer in fashion.

また, 裁縫で使用される型紙は, 個物としてはトークンであるがタイプとしてのパターンを表すものとして用いられる (渡辺 (1978:10))。



型紙

集合論でも, '3' という数は空集合 ϕ をもとに構成された個数3の集合として定義される (Barwise and Perry (1983:71))。

(12) $3 = \{\phi, \{\phi\}, \{\phi, \{\phi\}\}\} (= \{0, 1, 2\})$

この(12)で定義された集合は抽象的なものであるが, 集合としては3個のリングの集合と何ら変わりはない。

3. (媒体物としての) 発話と発語行為

「発話」という用語は, 「文を話す,あるいは, 書く行為」を指すこともあれば, そうした行為によって生み出される音声ないしは書かれた文字などの物理的媒体 (inscriptions) を指す場合もある (Lyons (1981:25-27))。以下では文を話したり書いたりする行為を「発語行為 (locutionary act)」と呼び, 「発話」という用語は発語行為によって生み出される物理的媒体を指すことにする。このように, 発語行為とそれによって生み出さ

れる発話としての物理的媒体とを区別する根拠は、例えば、(8)のMitchの発言 'I'm fine.' を第三者のLamarが報告する場合、次のように伝達部分 Mitch saidと被伝達部分 'I'm fine.' とに分けて伝えるということにある。

(14) Lamar: Mitch said, 'I'm fine.'

ここで、Mitch saidの部分は、Mitchの発語行為を表し、'I'm fine.' の部分はその行為によって生み出された媒体物である音声を表している。また、このように分けると、Mitchの発言の持つ「Mitchは（飲み物がなくても）大丈夫である」という内容は、媒体物としての発話の担う意味として捉え、「Oliverの飲み物の提供に対する断りとしての働き」は発語行為の担っている意味として分けて考えることができる。

媒体物としての発話が表す種々の意味を以下では一括して表示の意味 (representational meaning) と呼ぶことにする。この中には、(15a)のような平叙文の発話やそれに対応する(15b)の疑問文の持つ「Annaが他の女子達とランチに出かけたこと」といったようないわゆる命題内容 (propositional content) が典型的に含まれる。

(15) a. Anna is out to lunch with the girls.

b. Is Anna out to lunch with the girls?

また、発話から各種推論によって得られる情報も表示の意味に含める。例えば、次の会話において、Bの発話はまず「仕事中である」という表示の意味を持つ。

(16) A: Do you want to go play some ball?

B: I'm working.

一方、Aは自分の「野球をしに行かないか」という誘いかけに対するBの発話から「Bは野球には行けない(B cannot go and play any ball.)」という推意(implicature)と呼ばれる情報を推論によって得るが、こうした情報も表示の意味に含める。このように、表示の意味は、発話から得られる命題内容的意味、すなわち、事態とか状況を記述するような内容、を（ほとんど）すべて含む。こうした包括的な用語はあまり一般的ではないが、コミュニケーションの場において発語行為のもつ行為としての意味とそうでないものとの対比をはっきりさせるために、このような用語法を用いる。

一般に、行為の場合、その意味を問うことは、その行為者の目的あるいは意図 (intention) を問うことである (坂井 (1979:162-164))。例えば、「日記を書く意味は何?」という問いに対し、「心のうちをありのままに表現するために (表現しよう) 書いているのだ」といった答えが考えられる。発語行為の場合も同様に

話し手の目的・意図を問うことがその意味を問うことになる。(8)におけるMitchの発語行為 'I'm fine.' は、提供を断ろうという目的・意図のもとに行われており、その目的・意図が発語行為の意味になっている。このような発語行為の意味を以下では対人的意味 (interpersonal meaning) と呼ぶことにする。「対人的」というのは、発語行為の目的・意図は一般にコミュニケーションを行うことであり、常に聞き手である相手との関係において行われる行為であるからである。

4. 話し手の意味 (speaker's meaning)

Grice (1969) は、「あの発疹はハシカだった (ハシカを意味した) (Those spots meant measles.)」といった場合のように自然的因果関係に基づく意味に対し、「人が発話によってあることを意味する」とはどのようなことを考察した。そこでGriceは、ある話し手Sが、ある聞き手HにUを発話することによって、あることEを意味する (mean) ということ次のような意図的行為として規定している。

(17) By uttering U to hearer H, speaker S means E if and only if:

S intends the utterance U to produce some effect E in H by means of the recognition of this intention.

ここで特徴的なのは、SがEを意味するという場合、Hに効果Eを生み出すよう意図するだけでなく、この意図 (this intention) にHが気付くことによってEが生みだされるよう意図する、というところの「この意図」による指示は、自分自身をも含む全体の意図を指す、いわゆる自己言及的 (self-referential)、あるいは反射的 (reflexive) な関係になっていることである (Barwise (1989:194-195), Clark (1996:129-132))。

反射性の例

bold-face (bɔld'fæs/), *Print.* —*n.* 1. type that has thick, heavy lines, used for emphasis, headings, etc. —*adj.* 2. typeset in boldface. Cf. **lightface**.

This is a sample of boldface

Random House Dictionary boldfaceの項

例えば、Georgeが息子Samに対して次のような発話をした場合についてみてみると、

(18) George: I'm proud of you.

発話によって、Georgeは自分がSamのことを立派だと思っていることをSamに信じさせようと思図する

(これを意図 (i) とする) が, その意図 (i) の中にはSamがその意図 (i) に気付くことによって自分の思いを信じさせようとする意図も含まれている, というのである。

こうした「話し手があることを意味する (mean)」という意図的行為を, 字句通りではない意味が伝わる会話の例について見てみる。まず, 次は, SidがSusanという婚約者がいながら別の女性と付き合っていることに気付いたMayoが「婚約しているからにはSusanを愛しているのか」と詰め寄る場面である。

(19) Mayo: ...Do you love this girl?

Sid: *Oh, man, she's the greatest chick you ever want to know. She loves kids.*

Works with handicapped kids down at the church every afternoon.

Mayo: Man, that ain't what I'm talking about. I asked you if you loved her.

Sid: *Everybody loves her...*

An Officer and a Gentleman

はっきりした返事をせず言い訳がましいことばかり言うSidの発話から, MayoはSidがSusanを愛しているから婚約したわけではないことをおそらくすぐ察知するが, Sidはこのようなことを伝えようと意図してはいないので, 明らかにそうした情報はGriceの言う話し手の意味することではない。

次は, ジャガーに追突されたErinが, 弁護士Edを立て補償を求めて法廷で争っている場面である。

(20) Lawyer: *So, you must've been feeling pretty desperate that afternoon.*

Erin: What's your point?

Lawyer: *Broke, three kids, no job. A doctor in a Jaguar must have looked like a pretty good meal ticket.*

Ed: Objection.

Judge: Sustained!

Erin: What? He hit me.

Lawyer: So you say.

Erin: He came tearing around the corner out of control!

Lawyer: *An ER doctor who spends his days saving lives was the one out of control?*

Erin Brockovich

この場面で医者方の弁護士は, ジャガーに乗った医者には良いカモに見えただろうとか, 緊急治療室の医者車が車を制御できなくなるだろうかと言って, Erinが故意

に追突されたという推論を暗に誘導しよう意図している。しかし, その意図をErinに気付かせようとは意図していないし, 特に陪審員にはその意図を気付かれると不利になるので, 逆に意図を隠そうとしている。従って, この場合に弁護士が意図していることもGriceのいう話し手の意味していることにはならない。

三つ目は, 勤めている法律事務所によって自宅だけでなく車の中でも盗聴されていることに気付いたMitchとそのことにまだ気付いていない妻Abbyとの会話である。

(21) Driving her Peugeot, he raced through the short-term parking lot, paid the attendant and sped away toward midtown. After five minutes of silence, she leaned across and whispered in his ear, 'Can we talk?'

He shook his head. 'Well, how's the weather been while I was away?'

Abby rolled her eyes and looked through the passenger window. 'Cold,' she said.

'Chance of light snow tonight.'

John Grisham *The Firm*

ここでMitchは, はっきりNoと口に出して言えないので, いきなり天候のことを話題にして, 事務所側に聞かれるとまずいような話ではなく, 当たり障りのない話をするようにと遠回しにAbbyに伝えようとしている。そして, この場合それだけではなく, その伝えようとする意図を, Abbyの質問とは関係ないことを言うとかNoと口で言わずに首だけ振るといったやや普通ではないことをすることによって, 気づかせようとしている。従って, この場合はGriceのいう話し手が意味することの典型的な例と言える。

5. 表示的意味

発話の意味である表示的意味には, まず, 文の意味をもとに直示表現や代名詞などの意味を確定することによって得られる字句通りの意味, つまり, 言われていること (what is said) と, それをもとに推論によって得られる推意 (例えば, (16)のBの発話や(21)の例) とがある。「言われていること」の中には, コンテキストによって確定された指示表現の意味だけでなく, 文には無い様々な意味が含まれる。例えば, 次の文の発話ではandの前後の文が表す事態のあいだの一種の因果関係がその意味として含まれる (Cohen (1971)). (22) a. The old king has died of a heart attack and a

republic has been declared.

- b. A republic has been declared and the old king has died of a heart attack.

つまり、(22a)の発話では、「王の死が共和国の宣言」の一因であり、(22b)の発話では、「共和国の宣言が王の死の一因である」といったように違った意味に通常解釈される。しかし、次の例のようにandの前後の文を入れ替えても意味の変わらない発話もあるので、そうした因果関係はandの持つ意味ではなく、andは単に二つの文を結びつけるだけの働きをしていると考えられる。

- (23) a. Americans believe in the power of words and Japanese stress the importance of silence.

- b. Japanese stress the importance of silence and Americans believe in the power of words.

従って、(22)の例に見られる因果関係は、文の意味の一部ではなく発話において生じる意味と考えられる。

次の文の発話では、「丁度3人(=少なくとも3人で3人を超えることはない)子供がある」という意味に通例解釈される。

- (24) Mary has three children.

しかし、次の例の示すように4人いる場合にも用いられるので、three childrenの本来の意味は「少なくとも3人」で「3人を超えることはない」という意味は発話において生じた意味と考えられる。

- (25) Mary has three children. In fact, she has four.

さらに、次のような例では、文の意味が発話では特定、ないし、限定される(Rusiecki (1985))。

- (26) a. John is tall.

- b. It is miles from here.

- c. This is going to take time.

つまり、(26a)では、Johnが大人か子供かによって「成人男性の平均から見て高い」か、あるいは、「その年齢の子供の平均から見て高い」といったように特定される。(26b)や(26c)では、miles, timeそれ自体は量に関しては中立であるが、実際の発話では通例「かなり離れている」、「かなりの時間がかかる」といった限定された意味に解釈される。

他方、「言われたこと」とは異なった意味を話し手が伝えようとするものには、すでに見たような例に加えて、比喩とか誇張表現や次のような慣用句を使ったものがある。

- (27) That date was written with a fountain pen *or I'll eat my boot.*

Agatha Christie *The Murder at the Vicarage*

この例では、慣用表現I'll eat my boot と接続詞orの働きによって「万年筆によって書かれたこと」の真実性が強調される。次の例のScarの発話 'A monkey's uncle.' では、逆に「Simbaが王になること」が否定される。

- (28) Simba: Hey, Uncle Scar? When I'm king, what'll that make you?

Scar: *A monkey's uncle.*

Simba: Heh heh. You're so weird.

Lion King

つまり、Scarの発話は次のような条件文を想定しており、

- (29) If you are king, I will be a monkey's uncle.

「俺の言っていることがばかげたことであるのと同程度、おまえの言っていることはばかげたことだ」といった推意を持つ。

このように、発話の意味は、文の意味を補完・拡充したり、さらに、推論によって字句通りではない意味を持ったりと、状況によって様々な意味を持ち得る。コミュニケーションの場では、話し手は、そうした様々な意味を自己言及的な意図で持って話し手に伝えようとする。

発話は、その意味についての話し手の信念とかそういう意味のことを言ったというメタ的な情報も持っている(Carston (2002:119-120))。例えば、Maryが(30)のような発言をした場合、(30a)や(30b)のような意味も合わせて持つ。

- (30) Mary: Pigs swim.

- (31) a. Mary believes that pigs swim.

- b. Mary said that pigs swim.

次のような、見かけ上は問題ない文の発話が矛盾した言い方になるのは、このようなメタ的な意味を持つからである(Bach (2004:464-465), (2006:147))。

- (32) Mary: Pigs swim, but I don't believe it.

また、次の例のfranklyのようないわゆる文体離接詞(style adjunct)の働きも発語行為についてのメタの意味を考えることによって説明される(Carston (2002:120-121))。

- (33) Frankly, I don't trust Bill.

つまり、(33)の文の発話があった場合、franklyは、次に示されるように発語行為を修飾している。

- (34) I'm telling you frankly that I don't trust Bill.

次の例における慣用表現When you're right, you're right. (君がそう言うんならそうだろう)も、発語行

為に関するメタの意味を考えることによってその意味が説明できる。

(35) (脳梗塞で倒れた大統領に代わって執務を取ることになった影武者の話)

Novak: This guy has had a rebirth. This is a different fella in the White House now.

Kingsley: It doesn't happen often, Bob, but *when you're right, you're right.*

Dave

この場合は、従属節の中の発話もNovakの発語行為についてのメタの意味を持つと考えられる。

(36) …but, when *you say that you are right, I say that you are right.*

(= Rebirth doesn't happen often, but right you are when you say you are.)

こうした話し手の信念や発語行為についてのメタの意味も発話の意味に含められる。

6. 対人的意味

すでに述べたように、発語行為においては、その行為の意図が意味になる。一般に、発語行為のそうした意図とは、各種の心的態度 (attitudes) を聞き手に伝えようとする意図である。代表的な心的態度には、信念 (belief), 願望 (desire), 意志 (intention), 遺憾の念 (regret) といったものがあり、そうした心的態度を伝えようとする発語行為はそれぞれ陳述行為、依頼行為、約束行為、謝罪行為といった発語内行為 (illocutionary acts) と見なされる。例えば、そうした心的態度を直接表す次のような文の発語行為はそれぞれそうした発語内行為になる。

(37) a. I believe that everything happens for a reason. (陳述行為)

b. I want you to do this for me. (依頼行為)

c. I intend to do it for you. (約束行為)

d. I'm sorry, it was my fault. (謝罪行為)

このように、発語行為は心的態度を伝えようとする意図のもとに行われ、聞き手にその意図に気付いてもらえば、行為の目的・意図は達成され、発語内行為が遂行されたことになる。(37)のような発語行為では、伝えようとする心的態度は明示されているが、明示されていない場合は曖昧性の生じることがある。

次の例は、海軍士官養成学校の卒業式で、卒業生 Mayo が教官 Foley に祝福してもらう場面である。

(38) Foley: Congratulations, Ensign Mayo.

Mayo: *I won't ever forget you, Sergeant.*

Foley: I know.

Mayo: I wouldn't have made this if it weren't for you.

Foley: Get the hell outta here.

Mayo: Thank you, Sergeant.

An Officer and a Gentleman

ここで Mayo の最初の発語行為 'I won't ever forget you.' は、「(訓練でのしごきに対する) この恨みは絶対忘れないぞ」とも取れるし、「(このように卒業できた) ご恩は決して忘れません」とも取れる。前者の意図のもとではおどし行為になるが、後者では感謝の行為になる。ここでは後に続く Mayo の発言から感謝の行為であることが分かる。

一般には、次のような慣用化された表現を用いることが多く、その場合には意図の曖昧性とか取り違いはまず起こらない。

(39) a. *You will be sweet and help me, won't you?*

(依頼)

b. *You may want to rethink your wardrobe a little.* (助言, 提案)

c. *Let me come with you.* (申し出)

また、発話内行為を表す動詞を用いてどのような行為かを明示する場合もある。

(40) a. Your are fired.

b. I declare the court adjourned.

こうした場合は、心的態度を伝えようとするのではなく、制度・慣習に従おうとするのが発語行為の意図となる。例えば、(40b)の文を裁判長が発言するとき小槌をたたくが、その発語行為は、小槌をたたく行為と同じように慣習に従うものと考えられる。しかし、次のような例では、発語行為が動詞の表すような発語内行為になるのは、慣習に基づくのではなく意味的規則によると考えられる (Nakashima (2008))。

(41) a. I inform you that I have applied for a position.

b. I assert that the cosmic religious experience is the strongest driving force behind scientific research.

これは、次の文では発言すればそれだけで文が表す状況が成立しているのに似ている。

(42) I'm speaking English.

発語内行為は、談話というより大きなコンテキストの中では聞き手との関係を確立・調整しようという意図のもとで遂行されることで、さらに新たな意味を持つことになる。例えば、次はSandyの店でTerryが買い物をする場面であるが、Terryの2番目の発語行為は品物を買ってもらいたいという願望を伝えようとする意図のもとに行われ、依頼行為と見なされる (Geis (1995:39-44))。

(43) Terry: You have any widgets?

Sandy: Just got a shipment in yesterday.

Terry: *Id like three.*

Sandy: Sure.

この依頼行為は、様々な別の形でも行うことができる。例えば、次の疑問文を用いた依頼行為では、聞き手に敬意 (deference) を表そうという意図のもとに行われるより丁寧な行為になる。

(44) Can I have three?

さらに、仮定法を用いたり、話し手指向 (speaker-oriented) を聞き手指向 (addressee-oriented) に、また、能力を表す表現を意志を表す表現に、変えるとより強く敬意を表そうという意図になり、二重、三重と丁寧になる。

(45) a. Could you give me three?

b. Would you give me three?

一方、逆に次のような表現を用いると、敬意を表さない選択をすることになり、結果としてぞんざいな行為になる。

(46) a. Give me three.

b. You can give me three.

また、同一の表現の選択でも、聞き手との相対的地位関係や親密度によって、意図は変わってくる。例えば、一般にpleaseを用いた場合、話し手は自分を弱い立場に設定することにより聞き手に敬意を表そうとする意図により丁寧な依頼行為になる。

(47) Please shut the window.

しかし、目上の者が目下の者に向かって言った場合、単に儀礼的なもので敬意を表すものではない。また、非常に親しい間柄では、なにか別の意図があるのではないかと不審に思われ、'Hey, what's the matter?' (おまえ、一体どうしたんだ) と、真意を問いただされかねないことになる。

7. まとめ

ある文がコミュニケーションの場で話し手によって使用される一つの出来事は、使用する行為とその行為によって生み出される音声とか文字といった物理的媒体とに分けることが出来る。本稿では、前者を発語行為と呼び、その意味を対人的意味とした。そして、後者を発話と呼び、その意味を表示の意味とした。発話の表示の意味は、コンテキストによって確定、拡充され、さらに別の表示の意味を推論によって導いたり、より高次の表示の意味に組み込まれたりすることを見た。

一方、発語行為の対人的意味は、各種の心的態度を伝えようとする意図であり、その意図のもとに遂行される行為は発語内行為と呼ばれる。そして、その発語内行為はさらに談話といったより広いコンテキストの中では様々なポライトネスに関する意味を持つてくる。

参考文献

- Austin, J. L. (1962) *How to Do Things with Words*, Oxford: Clarendon Press.
- Bach, Kent (2004) "Pragmatics and the Philosophy of Language," In L. R. Horn and G. Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics*, Oxford: Blackwell, 463-487.
- Bach, Kent (2006) "Speech Acts and Pragmatics," In M. Devitt and R. Hanley (eds.) (2006) *The Blackwell Guide to the Philosophy of Language*, Oxford: Blackwell.
- Barwise, Jon (1989) *The Situation in Logic*, Stanford: CSLI Publications.
- Barwise, J. and Perry, J. (1983) *Situations and Attitudes*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Carston, Robyn (2002) *Thought and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*, Oxford: Blackwell.
- Clark, Herbert H. (1996) *Using Language*, Cambridge: Cambridge University press.
- Cohen, L. J. (1971) "Some Remarks on Grice's Views about the Logical Particles of Natural Language," In Bar-Hillel, Y. (ed.) *Pragmatics of Natural Languages*, Dordrecht: Reidel, 50-68.
- Geis, Michael L. (1995) *Speech Acts and Conversational Interaction*, Cambridge: Cambridge University press.
- Grice, H. P. (1957) "Meaning," *Philosophical Review* 66, 377 - 88.
- _____ (1989) *Studies in the Way of Words*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Huang, Yan (2007) *Pragmatics*, Oxford: Oxford University Press.
- Leech, G. N. (1983) *Principles of Pragmatics*, London: Longman.
- Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Lyons, John (1981) *Language, Meaning and Context*,

- London: Fontana Press
- Nakashima, N. (2008) "A Semantico-pragmatic Analysis of Performative Utterances, Part I," 『甲南大学紀要』 文学編 150英語英米文学特集, 1-19.
- Recanati, F. (2001) "Open Quotation," *Mind*, Vol.110, 637-687.
- Rusiecki, Jan (1985) *Adjectives and Comparison in English*, London: Longman.
- 坂井秀壽 (1979) 「言語」, 井上忠編 (1979) 『哲学』 第IV章, 161-214.
- Searle, J. R. (1969) *Speech Acts*, Cambridge: Cambridge University Press.
- _____ (1979) *Expression and Meaning*, Cambridge: Cambridge University Press.
- _____ (1983) *Intentionality: An Essay in the Philosophy of Mind*, Cambridge: University press, Cambridge.
- Sperber, D. and D. Wilson (1995) *Relevance: Communication and Cognition, Second Edition*, Oxford: Blackwell.
- Van Oosten J. (1986) *The Nature of Subjects, Topics and Agents: A Cognitive Explanation*, Bloomington, Indiana University Linguistics Club.
- 渡辺慧 (1978) 『認識とパタン』 東京: 岩波書店